

志向性という問題 : ブレンターノとフッサール

森村, 修 / MORIMURA, Osamu

(出版者 / Publisher)

法政大学国際文化学部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

異文化. 論文編 = Journal of Intercultural Communication

(巻 / Volume)

8

(開始ページ / Start Page)

151

(終了ページ / End Page)

190

(発行年 / Year)

2007-04-01

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00002984>

志向性という問題

——ブレンターノとフッサール——

森村 修

1 はじめに

——志向性という問題——

フッサールの現象学について語るとき、ほとんどすべての哲学者がかれの「志向性 (Intentionalität)」概念を取りあげる。その際に、志向性概念をフッサールの師であるブレンターノから継承したという“事実”をつけくわえることも忘れていない。たとえば、フッサールの身近にいて、一時期までかれの“弟子”として薫陶を受けたハイデガーは、『時間概念の歴史への序説』のなかで現象学の決定的な発見として「志向性」を筆頭にあげ、続けて「範疇的直観」、「ア・プリオリの根源的な意味」を指摘している。しかも、かれもまた、志向性を語る際にブレンターノに言及していることは重要である¹。もちろん、ハイデガーのような“弟子”の証言だけでなく、フッサール自身もまた、志向性とは「現象学的諸構造を貫通している包括的な論題」(Hua III -1/188) であると語っていることから、かれの哲学において志向性概念の重要性は決定的であるといつてよい。現象学的哲学にとつ

て「志向性」概念の重要性を疑うべくもない。

その一方で、ブレンターノから引き継がれた「志向性」概念は、フッサール自身によって完全に新しく改変されたという見解が有力である。ラントグレーベは次のようにいっている。

「フッサールが志向性というこの概念を〔ブレンターノから〕受け継いだ最初の瞬間から、既にそれを根本的に変えてしまったということ、それどころか、かれ自身後に語ったように、ブレンターノから受け継いだのはもともと志向性という言葉（Wort）にすぎず、事象の上では（der Sach nach）、最初からまったく異なったあるものがかれの眼中にあったということ、以上のことは、かれ自身にとっても、ずっと後になって、自らの発展の歩みをふり返ってみてはじめて明らかになったのである。こうして、共通の術語というものはある奥深い差異をおおい隠すこともあり得たのであり、——しかもそれは、さしあたって、フッサールその人をも迷わすに十分であった²」（強調ラントグレーベ）。

ラントグレーベの見解によれば、「志向性」について、フッサールもまた自分が継承したと考えていたブレンターノの“志向性”理解³を誤解していた。かれの問題意識はブレンターノのそれとまったく異なったものであった。このため、フッサールが考えていた志向性概念と、ブレンターノが語っていた“志向性”の内容とは本質的に異なっていた。それでは、どのように両者の見解が異なっていたのか。ラントグレーベは両者の志向性理解について次のような相違点をあげている⁴。第一に、ブレンターノは、フッサールのように意識の根本性質としての志向性を語ることをしない。かれが語るのは、「常に志向的關係（intentionale Beziehung）、つまりそれぞれ個別的な作用が何かあるもの、すなわちそれらさまざまな作用の志向的・《心的（mental）》

客観に対してもっている関係についてだけ⁵」である。さらにブレンターノは、意識の個々の作用が互いに異なっているのは、それらの作用がそれぞれ別々の「志向的客観 (intentionales Objekt)」をもち、それぞれ固有の対象 (Objekt) をもつと考えているのである。

その結果、第二に、フッサールにとって、二つ以上の「記述的に相互に異なる作用が自同的に同じ志向的客観 (identisch dasselbe intentionale Objekt) をもつことがありうる⁶」という考えが重要であったのに対して、ブレンターノにはそのような見解はあまり見られない。かれは「異なったさまざまな作用が等しい志向的關係 (die gleiche intentionale Beziehung) をもつことがありうる⁷」としか語らない。しかし、ラントグレーベによれば、ブレンターノがいうように、二つ以上のものが「等しい」といえるためには、あらかじめ「自同的に同一の志向的客観」が前提されていなければならない。つまり、いくつかの異なる作用が互いに別々に「自同的に同一の志向的客観」と関係をもって初めて、それらの作用が「等しい」といえるのであって、ブレンターノは、何に基づいて異なった作用が「等しい」と言えるのか明らかではない。

第三に、ブレンターノは「志向的關係」を重視してはいるが、その理由として「志向的作用の基本的な種類の分類、つまり《心的現象 (mentale Phänomenen)》の分類⁸」という目的によるものであり、フッサールのように、そこから意識の問題へと進む方向は模索してはいない。

以上から、ラントグレーベは、ブレンターノがさまざまな「心的現象」の分類や、多様な「心的現象」のあいだにある関係を探究することに力点を置いており、あくまでそのような観点から「志向的關係」を問題にするにすぎないと断定している。それゆえブレンターノにとって、志向的对象と現実中存在する対象 (客観) との関係や、意識の明証性に関するあらゆる問題は心理学的記述の問題とは何の関わりもな

い。そのため、ブレンターノは、現象学にとって重要なこれらの問題をあらかじめ度外視することができたのだという⁹。またラントグレーベは、ブレンターノは「認識論的実在論」の立場に立つことで、かれの“志向性”論のなかから「すべての認識論的な問いがはじめから意識的に排除されている」という。いいかえれば、ブレンターノの立場では、志向的对象をとまなう「心的現象」から現実的な対象へ、さらには現実的对象が属する「外界（Außenwelt）」へとつながる通路は、さまざまな作用を引き起こしたものへの因果的推論としての蓋然的推論でしかないことになってしまう。したがって、フッサールが直面した〈客観的なものを主観的なものに基礎づける〉という認識論的な問題は、ブレンターノにとって考察の埒外に置かれる。この意味でも、ラントグレーベは、ブレンターノの“志向性”論が限界を内包していると考えている。

もちろん、ブレンターノの“志向性”理解がフッサールのそれとは異なっているという、ラントグレーベの指摘は、私たちに有益な示唆を与えてくれる。しかしそれと同時に、私はラントグレーベのブレンターノ理解がブレンターノ哲学解釈にとって正当なものか否か、妥当性をもつか否かということとは別であると考えている。私見によれば、ラントグレーベの判断は、ブレンターノにとって公正であったかということについて、はなはだ疑問である。管見に触れた限りでも、ブレンターノ哲学研究の文脈においては、かれの弟子であったオスカー・クラウスや、その後のロデリック・ミルトン・チザムらによる「正統派解釈」と、それに対する最近の「修正的解釈」がしのぎを削っている。そこでも、いわゆる“志向性”をめぐる理解やブレンターノ哲学内部でのその位置づけが検討されている。これら解釈史の連関を無視して、フッサール現象学の立場から一方的にブレンターノ哲学を理解するのは公正ではない。しかも、後に詳しく見るように、フッサールが自ら哲学的な問題意識に依拠してブレンターノを意図的に歪曲して

理解していることを考え合わせれば、ラントグレーベがフッサールの立論に乗ったブレンターノ解釈を施した時点で、その解釈の正当性も疑われなければならない¹⁰。フッサールがブレンターノを矮小化して理解していると考えられるだけに、私たちは両者の志向性理解について慎重になるべきである¹¹。

そこで私は、多少迂遠とも思われるが、ブレンターノ“志向性”論を、フッサール現象学の文脈から切り離して検討することにしたい。そうすることで、フッサールが『論研』『補遺』でブレンターノの“志向性”論と知覚論を検討した真意を探ることができるだろう。そして、ラントグレーベが指摘したように、フッサールがブレンターノから志向性という「ことば」を引き継いだだけであるのか、「事象の上」でも引き継いだ部分があるのかという問いに対する答えをえることができる。そうするためにも、ブレンターノの“志向性”概念を検討することが必要であろう。

2 “志向性”概念の起源 ——ブレンターノの場合——

近代哲学において、“志向性”概念を復活させた立役者はブレンターノであるとされている。しかし、かれ自身が“志向性”という術語で、志向性について語っている箇所は皆無であることは特筆に値する。ブレンターノは、ほとんどの場合「志向的 (intentional)」という形容詞を用いており、名詞形としての“志向性”という「ことば」をほとんど使っていない。それでは、ブレンターノは「志向的」という術語で何を語ろうとしたのか。そこにはどのような背景が存在したのか。まず、これらの単純な問いから始めることにしよう。

ブレンターノはアリストテレス研究から自らの哲学的作業を開始し

たことは周知の事実である。したがって、かれが「志向的」という術語を用いたのも、スコラ哲学以来の伝統的な哲学史の素養に由来していることは容易に推察することができる。おそらく、ブレンターノにとっては、スコラ哲学における「志向 (intentio)」概念をめぐる議論が多種多様に存在したことも既知のことであつたはずだ¹²。しかし、さまざまな「志向」解釈のなかで、かれが「志向的」という術語をトマス・アクィナスの「志向」概念から継承し、19世紀後期の哲学界に再生したことは間違いない。

それでは、なぜトマス哲学でなければならなかったのか。この問いに答えるために、私たちはブレンターノの独自の哲学史観を理解することが必要になる。ブレンターノは、古代・中世・近世という哲学史的な時代区分のそれぞれを、(1) 上昇期、(2) 第一の下降期、(3) 第二の下降期、(4) 第三の下降期という四期の下位分類に分け、それぞれの時期でこれらの四期が循環するという独特な哲学史観をもっていた。つまり、ブレンターノの哲学史観から見れば、哲学史とは四期に分けられる発展と墮落のくり返しである。ちなみにかれは、古代の上昇期に属する哲学者としてはアリストテレスをあげ、中世の上昇期に属する哲学者としてアウグスティヌスとトマス・アクィナスをあげている。そして、ブレンターノ自身が属する19世紀の〈自然主義・実証主義・心理学主義の時代〉は、墮落していた哲学を再生させ、さらに上昇させる時期に当たっていた。だからこそ、かれは、哲学的に衰微した第三の下降期に属する「ドイツ観念論哲学」に対して対決の姿勢を打ち出すために、中世の上昇期（絶頂期）に属するトマス、さらに溯って、古代の上昇期（絶頂期）のアリストテレスを引き合いに出したのであつた。こうした哲学史の理解のもとにブレンターノは、「志向」という術語を用いる際に、アリストテレス、フィロン、アンセルムス、トマスなどの業績に触れている。

しかも「志向」概念に言及するのに際して、古代の下降期に属する

フィロンについては否定的な見解を述べているのに対し、中世の上昇期に属するトマスについては積極的に肯定的な発言をするというほど、かれの独自の哲学史観がかれの「志向」理解にとって決定的に作用していることは注意すべきである¹³。つまりブレンターノは、自らの哲学を打ち出し、直前の時代で優勢だった「ドイツ観念論哲学」を批判的に乗り越えるためのキーワードとして、「志向」という術語を過去の哲学の遺産のなかから蘇生させたのだった。いうなれば、ブレンターノには「志向」という術語を用いるための明確な意図があった。そしてこの意図には、ブレンターノが哲学という学問に何を期待し、それを心理学との関係にもとづいて、どのようなかたちで建設しようとしていたのかという目論見も反映している。それゆえ、私たちは以上のような背景に基づいて、ブレンターノの「志向」という術語を検討しなければならない。

もちろん、哲学概念史的には、「志向」概念がスコラ哲学の「形相的志向 (*intentio formalis*)」と「対象的志向 (*intentio objectiva*)」との区別、「第一志向 (*intentio prima*)」と「第二志向 (*intentio secunda*)」との区別に淵源していることは今さらいうまでもない。さらに溯れば、アリストテレス『形而上学』Δ巻第15章の「あるものに対して」という語句についてすら、「志向的」と表現することができよう¹⁴。しかし、ここで重要なのは、あくまでブレンターノがどのように過去の哲学的遺産から「志向」という術語の内実を引き継いだかということである¹⁵。私としては、その意味でのみ、かれの「志向的」という術語の起源を辿ることにしよう。

ヘドウィックによれば、ブレンターノの「志向的」という術語は、かれの教授資格論文「アリストテレスの心理学」(1866)にその萌芽を見いだすことができる¹⁶。かれが“志向性”概念の起源として考えたのは、アリストテレスの『デ・アニマ (靈魂論)』(第3巻第2章 425b24-b25)の次の箇所である。

「なぜなら感覚器官はいずれも感覚されるものを、その質料ぬきで受け入れるものだからである。そのゆえに感覚されるものが立去っても、感覚器官のうちには感覚や表象が残存しているのである。しかし感覚されるものと感覚との現実態は同じ一つのものである。しかしそれらの「何であるか」〔= 本質〕は同じではない。そして私がいおうとしているのは、たとえば現実態にある音と現実態にある聴覚とのことである¹⁷⁾」。

ヘドウィックによれば¹⁸⁾、アリストテレスは受容した感覚における感覚的な形相の、「志向的」ではないある種の「“非質料的” 内存在 (“immaterial” inexistence)」に言及している。この点について、ブレンターノは、〈質料をともなって現実に実現された「事物の形相」〉〔= 感覚されるもの〕と、〈魂のうちで非質料的に「事物の形相」が受容され感覚されたもの〉〔= 感覚〕との間に差異があることを指摘した。このとき重要なのは、ブレンターノが、アリストテレスにおいて区別された「感覚されるもの」と「感覚」との差異を際立たせるために、「客観的・実念的なもの (objective)」というスコラ哲学的術語を適用したことである。ブレンターノは、感覚という「非質料的内存在」を考える際に、デカルトの「客観的・実念的存在 (esse objectivum)」と「形相的存在 (esse formale)」との区別を導入することで、精神内の存在様態に新しい理解をもたらした¹⁹⁾。またチザムによれば²⁰⁾、デカルトにおいては「客観的・実念的存在」とは「観念によって表象された事物の存在性²¹⁾」を意味しており、「思考の対象としての何かあるものの存在」と考えることができる²²⁾。この意味で、デカルトにおける「客観的 (objective)」という言葉は現行の使用法と逆転していることがわかる。つまりデカルトが「客観的・実念的存在」と呼んでいるものは、現在では「主観における存在 (Sein im Subjekt)」とか

「主観的な反映のなかに与えられたもの（Gegebensein der subjektiven Widerspiegelung）²³」と呼ばれているものである。それはおもに、思考された当該の対象について、精神の内部に属する「客観＝対象」と考えられているものを意味している。それに対して、デカルトにおいては「形相的存在」は外界に現実に存在する対象を意味しており、いわゆる「現実的存在」と同義的に考えられている。

こうしたデカルト的区別を念頭において、ブレンターノは〈受容され知覚された形相としての形相〉〔＝質料なき形相〕を特徴づける。つまりかれは、「客観的なもの」という言葉で、精神内に存在する客観の特殊な存在様態として感覚を際立たせようとしたのだった。しかも、そのような感覚が「志向的」ではないことに注意しなければならない。ブレンターノは、感覚を精神的な内存在と考える一方で、それが“志向的ではない”ことを強調した。この点は忘れられるべきではない。ブレンターノは、『経験的立場からの心理学』（1874）において、感覚を「物的現象」として扱い、それが志向的ではないことを改めて強調することになる。しかし、ここではこの点について詳説すること避け、次の重要な点を三点指摘するに止めよう。

第一に、ブレンターノが「感覚されるもの」と「感覚」との区別をアリストテレスから継承し、さらにそれを「客観的なもの」として強調していることである。先の引用からも明らかなように、アリストテレスは外在的な対象としての「音」と、それが感覚器官を通じて受容された「聴覚」〔＝感覚〕とを区別した。ブレンターノもまた、アリストテレスから両者の区別を継承したうえで、さらに精神内に存在する対象の存在性を特化した。つまり、かれにとって対象とは、〈感覚される外在的な対象〔＝音〕〉と〈「感覚されるもの」〔＝聴覚〕〉の二種類ということになる。

第二に重要なのは、ブレンターノにおいても、その両者を結びつける働きをしている「感覚器官」を認めていることだ。つまり、外在的

対象によって与えられる感覚を受容する「感覚器官」の存在が前提されていることは注意してよい。

第三に、“感覚するもの”と“感覚されたもの”との区別がすでにブレンターノに見られるということだ。しかもそれがアリストテレス経由で、ブレンターノに届いているということは忘れられるべきではない²⁴。あまり顕在的に見えないけれども、ブレンターノの思考のなかには、(1) 外界に実在する“対象”、(2) 感覚器官を通じて“感覚するもの”、(3) 感覚器官によって“感覚されたもの”という三項が分類されているということだ。そして「客観的・実念的なもの」として、精神の内部に存在する“感覚されたもの”は、あるものを「代表象 (represent) する²⁵」機能を保持していることにも触れておかねばならない。そしてこうした三項は、ブレンターノの影響のもとでトルドフスキーが導入した「対象」・「作用」・「内容」という区別の祖形として考えることができる²⁶。もちろん、ブレンターノがこのことをどこまで自覚していたかは定かではない。したがって、私たちとしては、ブレンターノが、スコラ哲学的概念をデカルト哲学の文脈で理解し、さらに「志向」という術語の意味づけを、かれのスコラ哲学の解釈の文脈で鑄造し直したということを確認できればよい。その意味で、ブレンターノ哲学における「志向」概念は、アリストテレスに由来するスコラ哲学と、デカルト哲学の影響によって形成されたということができるのである。

しかし、これだけの話であれば、ブレンターノが“志向性”概念の発掘者として、つねに引き合いに出される理由としては不十分である。そこで次に私たちは、ブレンターノ哲学において、「志向」概念がどこまでかれの哲学のなかで重要な位置を占めているかを明らかに必要がある。

3 プレンターノの「心的現象」

次に私たちは、プレントナー “志向性” 論の検討に入らなければならない。かれの “志向性” 論についてさまざまな立場から論じられる場合に必ず引用されるのが、『経験的立場からの心理学』（1874）の次の箇所である。

「あらゆる心的現象は、中世のスコラ哲学者が対象の志向的（おそらくまたは、心的）内存在（die intentionale (auch wohl mentale) Inexistenz eines Gegenstandes）と呼んでいたものによって特徴づけられる。そしてまた、完全に曖昧さを免れているわけではないことばではあるけれども、私たちのいう、内容への関係、客観（Objekt）（このことで、実在〔Realität〕を理解してはならない）への方向、あるいは内在的対象性（die immanente Gegenständlichkeit）によって特徴づけられている。どのような心的現象も、同じ仕方ではないにせよ、自らのうちに何かを客観として含んでいる。表象では何か表象され、判断では何か肯定されたり否定されたりしており、愛では何か愛されたり、憎しみでは何か憎まれたり、欲求では何か欲せられたりする、などというように。このような志向的内存在はもっぱら心的現象だけに特徴的なものである。どのような物的現象もこれに類似したものを呈示しない。そこで私たちは次のようにいうことによって、心的現象を定義することかできる。すなわち、心的現象とは、対象を自らのうちに志向的に含む現象である、と²⁷」。

この箇所はたびたび引用されているけれども、十分に理解されているとはいえない。もちろん、プレントナーの『経験的立場からの心

理学』そのもののわかりにくさも手伝っているのか、一定の解釈を呈示することは困難なのかもしれない。それゆえ、この箇所をめぐる、解釈上の対立が見られることもしばしばである。解釈の問題に即していえば、かのフッサールも例外ではない。というのも、私にはフッサールもまたブレンターノ“志向性”論の解釈に関して、明らかに誤読をしているように思われるからだ。そして、フッサールに引きつけて理解されたラントグレーベのブレンターノ批判は、ブレンターノの真意を十分に理解していなかったことに起因する、フッサールに有利な解釈にすぎない。フッサールの意図がブレンターノのそれと異なっているということは当然であり、両者の哲学観や哲学的な目的の相違は明白である。それにもかかわらず、ラントグレーベのいうようなかたちでフッサール志向性論をブレンターノと比較して、前者を後者よりもより進んだもの、あるいはより広範なものと解するのはあまり公正な態度ではない。したがって私たちとしても、フッサールがブレンターノをどのように理解した結果、ブレンターノの“志向性”論と齟齬をきたしたのかを確認する必要がある。こうした作業は結果的に、フッサールの志向性論の独自性＝特異性を明らかにすることに繋がるはずである。

そこでまず、私としては、ブレンターノ哲学の解釈をめぐる対立を瞥見することで、ブレンターノにおける“志向性”の位置を確認しておこう。ブレンターノ哲学研究に際して注目すべきなのは、ブレンターノの弟子であり遺稿整理者でもあるクラウスや、いわゆる“オーストリア哲学”の紹介と検討に貢献してきたチザムによる「正統派解釈²⁸⁾」と、最近のブレンターノ哲学研究で頭角を現してきたマカリスターによる「修正的解釈²⁹⁾」との対立である。

先のブレンターノの引用箇所について、チザムは「存在論的テーゼ」と「心理学的テーゼ」の二つが含意されていると解する。かれによれば、「存在論的テーゼ」とは、対象が非実在物であっても、その対象

とのあいだに志向的関係を保持できるとするものである。つまり、「ユニコーンについて考える (thinking about a unicorn)」ことと「何も考えない (thinking about nothing)」こととのあいだには区別があり、前者の場合には志向的に対象に関わっているのにたいして、後者の場合には、対象に関わっていない。したがって、存在論的テーゼによれば、志向的関係には、思考や判断のような何らかの心的作用が遂行されている限り、必ず志向の対象が存在することになる。それは志向の対象が現実実在するか否かということには直接的には関係がない。

それに対して「心理学的テーゼ」とは、志向性とは心理学的現象 (psychological phenomena) に特有のものであり、「心的なもの」を「心的でないもの (物理的なもの)」から区別する基準となるものである。ブレンターノによれば、「私たちのさまざまな現出 (Erscheinung) による世界全体は、二つの大きな分野、すなわち物的現象の分野と心的現象の分野とに分かれている³⁰」。このとき、心的現象とは、それ自身、表象作用としての表象か、あるいはその表象を基礎としている現出からなる³¹。そして記述心理学の対象とは心的現象であり、その根底にはつねに表象作用としての表象が存在している³²。その一方で、表象に基づかないあらゆる現象はすべて物的現象に属するのである。以上から、チザムの心理学的テーゼを肯定するとすれば、ブレンターノにとって問題であったのは、物的現象から心的現象を分類し、心的現象を記述心理学の対象として限定することにあつたということになる。

ただチザムは、二つのテーゼを1874年のブレンターノに読み込むことはできるが、1904年から1905年頃を境にして存在論的テーゼを放棄し、非実在的对象の存在を否定し、「もの主義」を唱えるようになるという。それは、晩年のブレンターノが、非実在的对象の存在に対して好意的であると考えられるフッサール現象学やマイノング対象論との対質において、こうした境地に至ったからだ。

しかしブレンターノの解釈において、クラウスやチザムに代表され

る「正統派解釈」は、ありもしない存在論的テーゼをブレンターノに読み込み、これもまたありもしない「転回」を想定する誤謬に陥っていると批判する「修正的解釈」が、マカリスターによって提出された。マカリスターによれば、チザムはブレンターノが導入した物的現象と心的現象とのあいだの区別が、心的現象が実際に実在する対象にも実在しない対象にも関係するのにたいして、物的現象は実在する対象にしか関係しないということに根拠をおいている。これについて、マカリスターは「チザムはブレンターノの文章のどこにこの区別を見出すのか³³」と問う。彼女によれば、ブレンターノが言っているのは、ただ「心的現象は、対象に関わっている (refer to) のであり、直接対象に向けられている (directed toward) けれども、このことは物的現象にとっては正しくない³⁴」ということだけである。端的に言えば、心的現象は対象をもつが、物的現象は対象をもたないということにすぎない。したがって、心的現象が現実実在する対象と実在しない対象との双方に関わるということは帰結しないし、まして心的現象が対象の実在性・非実在性を問題にしないということは帰結しない。

マカリスターによれば、チザムが対象の存在性格を誤解したのは、彼がブレンターノの「実在」という概念を取り違えたからだ。チザムの「ブレンターノの実在 (性) (eine Realität)」理解そのものに難点がある。彼女によれば、ブレンターノは「実在性」を「現実存在しているもの (something that exists)」と同義的に理解してはいない。「ブレンターノは、実在 (realia) と非実在 (irrealia) (実在的なものと非実在的なもの [Realitäten and Nichtrealitäten]) について語っているのであり、そして、現実存在する〈もの〉と現実存在しない〈もの〉 (what exists and what does not exist) について語っているのであり、かれはそれぞれの場合で異なったことを考えているのである³⁵」。つまり、ブレンターノにとって、実在・実在的な〈もの〉とは特殊な個別的な〈もの〉 (a particular individual thing) であり、非実在的な〈もの〉

とは非-〈もの〉(non-thing)である。それはたとえば、「普遍、種、類、事態あるいは価値」のようなものを意味している。それゆえ、たとえそれが現実存在(exist)しなかったとしても、そのものは実在として考えることができるし、個別的な〈もの〉でも実在的でありうるとブレンターノは考えている。だから、ユニコーンは「特殊な個別的な〈もの〉であるし、それゆえたとえそれが現実存在していなくても、実在的なものである³⁶⁾」。したがって、マカリスターの解釈によれば、実在と現実存在とは重なり合うものではなく、実在であっても現実存在しないものがありうることになる。

たしかに、チザムの解釈よりも、マカリスターの解釈の方に説得力がある。しかし私たちとしてはそれに満足することなく、ブレンターノに即して補足しておきたい。かれは、「ある対象の志向的(おそらくまたは、心的)内存在(die intentionale (auch wohl mentale) Inexistenz eines Gegenstandes)」という箇所についた註の中で、「彼ら〔中世のスコラ哲学者たち〕はまた、『何かあるものにおいて対象的(客観的)である(gegenständlich (objective) in etwas sein)』という表現を用いている。しかしその表現は、現在私たちが用いようとしたら、まったく逆に、精神の外部にある現実的な存在の関係として解されてしまうだろう。それでも、ときおり類似的な意味で使われる『内在的に対象的である(immanent gegenständlich sein)』という表現がこのことを想起させる。そして、そのような表現に関して、明らかに『内在的』ということばは、危惧されうる誤解を排除するはずである³⁷⁾」と述べている。つまり、ブレンターノによれば、「対象の志向的内存在」とは、“心的現象の内部に対象的に存在していること(=対象として存在していること)”を意味している。そして心的現象が「対象への関係」であり、「客観への方向」であるとすれば、そもそも心的現象とは心的現象の対象に対する「ひとつの関係の仕方」であるといつてよい。リチャードソンもいうように³⁸⁾、チザムのように心的現象を「そ

の対象の存在についての様態 (a mode of existence of those objects)」として理解するよりも、マカリスターのように、「対象へのひとつのタイプ (a type of relation to objects)」として理解した方がよいだろう。そして、心的現象の対象が志向的關係にあるとき、その対象とは、ブレンターノもいうように、心的現象の「内容」といった方がより正確である³⁹。

チザムの存在論的テーゼに関していえば、ブレンターノの心的現象とは、現象が表象と同義であるということから、それは“心の内部”で生起する表象を意味しており、“心の外部”に存在するもの（現実存在するさまざまな〈もの〉）の存在性格を保持する必要はない。いいかえれば、ブレンターノにとって、現実の世界に存在するものは“とりあえず”心理学の対象にならないがゆえに、志向的關係に関して問題にならない。マカリスターのいうように、実在（性）とはあくまで心的現象の内部にある「内容」が保持する性格であって、志向的对象が外界に存在するか否かは不問のままであるとってよい。したがって、チザムのように、志向的關係を保持しうる志向的对象の存在性格に関わる存在論的テーゼを主張できるということの意味しない。端的に言えば、1874年の時期のブレンターノにとって、志向的对象の現実存在・非現実存在とは“問題になっていない”。このとき、「実在（性）」とは現実存在と同義ではないし、外界に実際に存在する〈もの〉を端的に意味することもない。このように、チザムの存在論的テーゼをブレンターノの著作に読み込むことは不当なものとして考えることができる。

しかし、たとえそうであるとしても、それではブレンターノ自身は、外界に現実存在する〈もの〉をどのように考えていたのかという問題がある。そしてこの問題が、ブレンターノの哲学・心理学に対する態度に関連していることを確認しておくことは無駄ではない。

ブレンターノは心理学を学 (Wissenschaft) として規定する際に、

「自然科学と同様に、心理学の基礎を形成しているのは知覚と経験である。それもとりわけ、固有の心的現象についての内部知覚（die innere Wahrnehmung）であり、心理学にとって、この内部知覚が源泉となる⁴⁰」と語っている。おおくの心理学者が心理学を「心についての（科）学（die Wissenschaft von der Seele）」と考えているのに対して、かれ自身は心理学を「心的現象についての学（die Wissenschaft von den psychischen Pänomenen）⁴¹」と規定しようとしていた。さらに注意しなければならないのは、心的現象についての学としての心理学は、哲学を基礎づける学としてだけでなく、美学、論理学、倫理学、政治学などの実践的な諸学をもその上で成り立つ基礎的な学であると考えていた⁴²。

その一方で、ブレンターノは心理学を科学的な学問として定立しようとしていた。このように考えるかれの思考の背後には、ある種の实在論的形而上学が潜んでいる⁴³。だからこそ、外界に存在する〈もの〉は、私たちの心的現象がどんなものであれ、それに関わりなく現実存在すると暗黙のうちに前提されているのである。それは端的に言えば、かれは外界の存在を疑っていなかったといえるのであって、その意味で、当初から現実存在しないようなものに関しては関心を持っていなかったとさえいうことができる。ブレンターノにとって重要だったのは、心理学の対象としての心的現象と、心理学の対象となりえない物的現象との差異であり、それらを分類することである。

いずれにせよ、ブレンターノによって導入された「志向的關係」という考えは、トワルドフスキーやフッサールらによって徹底的に検討され、フッサール現象学やマイノング対象論として洗練され、発展することになる。しかし問題はまだ残されている。というのも、ブレンターノにとって「対象への関係」や「客観への方向」が心的現象の特徴であるとすれば、心的現象と関係づけられている「対象」や「客観」、すなわち「内容」とは何を意味するのか。それはすでに見てきたよう

に、外界に現実存在する〈もの〉ではなく、心的現象の内部に存する“作用内容”でしかない。ブレンターノによれば、それが「物的現象 (das physische Phänomen)」と呼ばれるものである。そこで私たちとしても、ブレンターノにおける物的現象について考えてみなければならない。

4 ブレンターノの「物的現象」

マカリスターがチザムを批判したように、心的現象と物的現象との差異は、心的現象が物的現象との関係性において成立しているのに対して、物的現象がいかなる対象とも関係しないということにある。それでは、ブレンターノにとって物的現象とはいかなるものだったのか。心的現象と比較して次のようにいっている。

「心的現象にたいする具体例を提供しているのは、感覚あるいは想像によるあらゆる表象である。そして私がここで表象ということで理解しているのは、表象されたものではなく、表象する作用である。したがって、音を聴くこと、色のついた対象を見ること、暖かさや寒さについて感覚すること、それらと同様に類似した想像の状態が具体例であり、それらを私が心的現象と考えるものである。しかし同様に、もしも別の仕方でそのような思考が現実的に起こるとすれば、普遍的概念を思考することもそうである。さらにあらゆる判断、想起、期待、推理、確信あるいは意見、そしてあらゆる懐疑——これらは心的現象である。そしてまた、喜び、悲しみ、恐怖、希望、勇気、絶望、立腹、愛、憎、欲求、意欲、意図、驚愕、驚嘆、軽蔑などのような感情運動もまた心的現象である。それに対して、物的現象の具体例は、私が見る色、形態、景色、私が聴く和音、私が感じる暖かさ、冷たさ、香り、ま

た想像のなかで私に現出する類似した形成体である⁴⁴」。

ブレンターノのいう心的現象とは、私たちが経験するあらゆる意識体験をすべて包括しているといつてよい。それには、感覚や感情・情緒的なものから始まって、理性的な判断や推論に至るまで、「心の働き」として考えられるありとあらゆる事柄が属している⁴⁵。また、物的現象は、感覚に与えられる〈もの〉の性質であるであるということができる。ただ、愛する働きには〈愛されるもの〉が対象（内容）として含まれているし、期待する働きには〈期待されるもの〉が含まれている。これらは単純な感覚的性質ではないけれども、それ自身としては作用ではなく、作用内容を意味しているために物的現象に分類されている。ここで注意しなければならないのは、物的現象に分類される感覚的性質がおもに外的知覚によってもたらされているということだ。ブレンターノは物的現象が「外的知覚の対象として現れる⁴⁶」と考えている。

しかし、ブレンターノにとって内的知覚と外的知覚の優位差は決定的に重要であることを忘れてはならない。なぜなら、内的知覚が直接的で明証的であり確実であるのに対して、外的知覚は志向的であるにすぎず、不確実で相対的だからだ。「私たちが心的現象とは内的知覚を通じて把握される現象であると語るとき、それと共にいわれているのは、そのような内的知覚が直接的に明証的であるということである。…内的知覚はそもそも本来的にことばの本来的な意味で唯一の知覚である⁴⁷」。それに対して、「いわゆる外的知覚は、厳密に解するとすれば知覚ではない⁴⁸」。内的知覚によってもたらされる心的現象は「志向的存在のほか、現実的存在も帰属するような現象」であって、「認識、喜び、欲求は現実に存立する」が、物的現象としての「色、音、暖かさはただ現象的であるにすぎず、志向的でしかない⁴⁹」。もちろん、物的現象は現象である限りで私たちにとって表象されているはずである。しかしそれは、現実的に存在しえず、ただ志向的にしか存立する

ことができない。

それでは、このように特徴づけられた物的現象とは実際に“感覚的性質”なのか。クラウスは次のようにいっている。「“心的現象”という表現で、ブレンターノは例外なく意識の出来事、意識状態と同様のこととして理解している。“物的現象”という術語で、かれは“感覚的性質”（色、音、臭跡性質）あるいは一般的に“空間的なもの、物体的なもの、延長されたもの”と同様に理解している⁵⁰」。クラウスのいうことがブレンターノの真意であるならば、物的現象は単に感覚的性質であるだけでなく、「空間的、物体的、延長されたもの」である以上、個々の感覚的性質を超えてそれら性質の複合体をも指しているといわなければならない。それゆえ、私たちの感覚が心的現象によって含まれている「内容」であるとき、物的現象は外界に存在している物理的な〈もの〉の性質ではなく、感覚的性質とその複合体まで含んだものとして特徴づけることはできるだろう。その意味で、物的現象は物理的に存在する〈もの〉の客観的性質と同じものではない。ちなみにブレンターノは、次のようにもいっている。

「光、音、熱、場所、そして場所的運動などの自然科学者があつかうさまざまな現象は、真に現実的に存立している〈もの〉（die Dinge, die wahrhaft und wirklich bestehen）ではない。それらの現象は、その影響を通じて自らの表象を生み出している現実的なものについての記号（Zeichen von etwas Wirklichem）である。しかしだからこそ、それら諸現象は現実的なものに対応している像（Bild）ではなく、その現実的なものについて、ただかなり不完全な意味で知識を与えるにすぎない⁵¹」。

つまりブレンターノによれば、真に現実的に存在するものは私たちには与えられず、「それ自体で真に存在するものは現れ（Erscheinung）

のなかには現れないのであり、現れるものは真なるものではない⁵²」。それゆえ、物的現象の真理といったものは、「単に相対的な真理にすぎない⁵³」ことになる。また、物的現象は、物理的な〈もの〉の性質として、感覚を離れて外界のなかで客観的に確実なものとして特徴づけられているわけではない。

結果的に、物的現象は志向的關係によって心的現象に含まれる対象(内容)として現象する(= 現れる)(*erscheinen*)しかない。その一方で、物的現象は、「真に現実的なものの記号」でありながら、「真に現実的なもの」と対応していない。クラウスがいうように、物的現象が「空間的・物的・延長されたもの」であるならば、感覚的性質が客観的な空間の性質を保持することを認めてしまうことになりかねない。また、マカリスターによって指摘された「普遍、種、類」のような一般者がブレンターノにとって実在するならば、一般的なものとして、〈もの〉の物理的な客観的性質も実在することは否定できない。それゆえ、客観的な性質は「真に現実的に存在するもの」として私たちの表象(現象)には現れないけれども、物的現象を通じてその「実在性(Realität)」だけは保証されていることになる。ここには、ブレンターノの実在論的形而上学を垣間見ることができよう。そして、こうした前提に基づいて、かれは自然科学としての「経験的立場からの心理学」を確立しようとしたのだった。

5 心的現象の反省性と反射性

以上のように、ブレンターノは物的現象と心的現象とを分離し、「心的現象についての学」としての心理学を基礎にする哲学を構築しようとする。その際に、心的現象が内的知覚によって見出されることを重視したことを思い起こそう。かれは、心的現象が作用であり、内容と

しての物的現象とは異なる性質を持つことを指摘したが、それでは心的現象はどのように作用として心理学の基礎として把握されるのだろうか。つまり、心的現象が作用として内容を含むとき、その作用と内容とを分離するために、さらに作用を分析する働きをもった心的現象が必要になるのではないか。端的に言えば、心的現象を反省する心的現象の存在が措定されなければならないのではないか。

この点について、ブレンターノは次のようにいっている。

「音の表象 (Vorstellung des Tones) と音の表象についての表象 (Vorstellung von der Vorstellung des Tones) は、ただひとつの心的現象を形づくっているにすぎない。この唯一の心的現象を、一方では物的現象であり、他方では心的現象であるような、二つの異なる客観への関係のなかで考察したことによって、私たちはただ概念的に二つの表象に分割したにすぎない。音が表象されている同一の心的現象のなかで、同時に私たちは心的現象そのものを把握する。しかも、その心的現象が内容として、その音をそれ自身の内にもっており、同時にその心的現象がそれ自身内容として現在の限りで、このような二重化された固有性に従って、私たちはこの心的現象を把握する。私たちは音 (Ton) を第一次的客観 (das primäre Objekt)、聴くこと (das Hören) を聴くことの第二次的客観 (das sekundäre Objekt des Hörens) と呼ぶことができる。なぜなら、時間的にはそれらは確かに両方とも同時に現れるが、事象の本性上、音はより先に存在しているからである⁵⁴」(強調ブレンターノ)。

ブレンターノによれば、物的現象と心的現象とは「第一次的客観」と「第二次的客観」という二種類の「客観」に分類され、概念的に分けられているが、両者は同時に現れており、ひとつの心的現象を形づ

くっている。確かに、心的現象をそれだけ取り出して事後的に抽象的に分析するならば、物的現象としての「音の表象」は一次的に与えられているのにたいして、「音の表象についての表象」という“音を聴く”作用（心的現象）は二次的であり、「音の表象」に対して時間的に遅れているといえるだろう。しかしこの場合、“音を聴く”という心的な作用は、作用内容としての「音の表象」（＝物的現象）に関わると同時に、「聴くこと」という作用自らにも関係していることに注意しなければならない。ここには、心的現象における「反射性(reflectivity)」の契機が存在しているといってよい。

しかもブレンターノは、「音の表象は聴くことの表象がたとえ存在していなくても、初めから少なくとも、考えられないということはない(nicht undenkbar)だろう。しかしそれに対して、聴くことという表象は、もしも音の表象が存在しないならば、明らかな矛盾である⁵⁵⁾」と述べている。ブレンターノによれば、心的現象としての聴く作用は対象(＝作用内容)に関係しなければならない。それは逆にいえば、対象(作用内容)が存在しないならば、心的現象そのものも存在しえないといってもよい。この点についてヘドウィックは、ブレンターノの反省性(reflectivity)としての「認識作用」は、「特殊的な対象を志向し、そうすることで心的な内在性を超越(transcend)する⁵⁶⁾」と語っている。つまりブレンターノのいう心的現象とは、対象(作用内容)としての物的現象に関わると同時に、自らに関わるという二重関係性によって特徴づけることができる。そして、反省作用としての認識作用(心的現象)は、自らのうちに“内在する”作用内容に関わる一方で、自らに関わることで作用内容を“超越している”といえよう。そして、心的現象における作用内容と自らに対する“内在と超越”の関係性を、ブレンターノの“志向性”論の要諦として確認することができるだろう。

しかし、ブレンターノによる反省作用についての見解は、不十分

であることは否定できない。「音の表象」と「音の表象についての表象」とは同一の表象として取りまとめられてしまうけれども、「音の表象についての表象についての表象についての……」というように、無限背進に陥る危険をはらんでいる⁵⁷。この点について、レカナティは興味深い指摘を行っている。かれによれば、ブレンターノの心的作用の「反省性」を、記号の「反射性 réflexivité」と考えることによって、ブレンターノの“心的現象論”を《記号の理論》に差し向けようとする。つまりレカナティは、心的作用の特徴を、「それが記号であること、いいかえれば、自分自身とは別の〈もの〉を再現前 (= 表象 représenter) するということ⁵⁸」に見出している。

ブレンターノの心的現象は、それが心的に内在的な現象である限り現実的な実在の世界に存在する〈もの〉とは異質な存在性格を備えている。この意味では、ブレンターノ哲学は、フーコーがいう「古典主義時代」の哲学、つまりデカルト以来の〈観念の理論〉との親近性を保持しているといってよい。レカナティはいつている。

「もっと注意してブレンターノの著作を眺めるならば、そこにまたデカルトおよびかれの思考理論への重要な言及が見出されるだろう。たとえば、思考の客観的・実念的実在性と形相的実在性との区別、思考されるものとそれを思考する事実との区別といった言及が見出されるだろう。そして、記号としての思考についての古典主義的理論の核心にあるデカルトの区別は、ブレンターノ哲学のなかに明瞭に甦っているのである⁵⁹」。

レカナティは、私の先の指摘を補足するかのよう、ブレンターノ哲学とデカルト哲学との関連性を指摘している。それよりも興味深いのは、かれがブレンターノ哲学のなかに、《記号の理論》としてのデカルトの《思考の理論》を読み込んでいる点である。心的作用〈心的

現象)は、それがそもそも物的現象の表象であることによって、物的現象を〈記号〉として再現前(表象)している。つまり、プレーターノもいうように、物的現象である「音の表象」に、心的現象としての「音の表象についての表象」もまた付随していることによって、私たちは「音の表象」と「音の表象についての表象」とを概念的に区別することができる。しかしよく見ればわかるように、ここには、(1)物理的に存在者としての〈音そのもの〉、(2)物的現象としての〈音の記号(表象)〉、(3)「音の表象についての表象」としての〈音の記号の記号(表象の表象)〉という三つの層が存在している。しかし、「音の表象」を反省する「音の表象についての表象」は、「音の表象」と同一の表象であるといわれるのだから、問題なのは同一のひとつの表象から、いかにして別々の表象が生じてくるのか、そしてその際に、いかにして「表象についての表象」が「反省性=反射性」を獲得することになるのかということだ。しかも、心的現象が物的現象としての「音の表象」と切り離すことができないとしたら、問題はより複雑になるだろう。レカナティは次のようにいっている。

「私がある音を聴くとき、私がもつ音の聴覚はある種の心的作用である。ところでこれは、自分自身とは別の対象、つまり音を、私に再現前(表象)するという特性を持っている。聴くという作用においては、私は、再現前(表象)する作用と区別される対象(objet)として音を、私自身に再現前(表象)するのである。その作用は、それ自体とは異なる対象を再現前(表象)しうるために、何らかの仕方では自分自身再現前(表象)されなければならない。その作用は、その作用の対象を、作用と区別される対象として再現前(表象)しうるために、対象と区別されたものとして自らを反射(反省[se réfléchir])しなければならない。心的作用はその対象を再現前(表象)する際には、自分自身を反射(反省)する

のである。…私たちが何かを自分に再現前（表象）するとき、私たちは自分がそうしているという意識をもつ。つまり、再現前（表象）することのうちに、再現前（表象）の本来の対象と並んで再現前（表象）が再現前（表象）されているのである⁶⁰」

レカナティによれば、私たちの心的現象はあらかじめ物的現象の性質を「反射＝反省」しているのであり、心的現象はこの意味で物的現象から切り離すことができない。しかもそれと同時に、それは物的現象に対する反省＝反射性を獲得している。レカナティは、このような反射関係を図式的に $x \rightarrow y$ と表現する。心的現象と物的現象との関係は、比喩的にいえば、二枚の鏡とそれら鏡のあいだにおかれた対象との関係ということもできよう。鏡は対象の再現前（表象）を行うと同時に、対象とは異質な存在として自らを互いに写し合う⁶¹。物的現象は心的現象に反射し、物的現象を“反省する心的現象”の対象になる。その一方で、“反省する心的現象”そのものもまた、自らを反射させることによって、“反省する心的現象”を反省する心的現象の対象になるができる。その意味で心的現象は二重化されている。しかし、こうした図式では、物的現象を“反省する心的現象”と、その心的現象を“さらに反省する心的現象”とのあいだに、実質的に差異はないように見える。果たして、両者のあいだには差異はないのだろうか。

レカナティによれば、記号としての再現前（表象）理論（あるいは再現前（表象）主義〔représentationalisme〕）は、ブレンターノ以後、フレーゲとフッサールによって批判されることになる。そして、彼らの批判の矛先は、いわゆる「心理学主義」であり、記号の再現前（表象）論への批判は「心理学主義との戦い（lutte contre le psychologisme）」⁶²によって正当化された。ただ、「心理学主義批判」としての「心理学主義との戦い」をめぐるフッサールの問題は、次章に譲ることにして、

ここではブレンターノによる心的現象の概念の孕む問題を指摘するだけに止めることにしたい。それでは次に、私たちはフッサールのブレンターノ批判に場所を移して、フッサールがいかにブレンターノを「誤解」していたのかを明らかにすることにしよう。

6 フッサールによるブレンターノ現象論批判

——おわりに代えて——

フッサールは、『論理学研究』末尾に「補遺」として「外的知覚と内的知覚。物的現象と心的現象」という論考を載せている。そこで問題になっているのは、ブレンターノの「内的知覚」の問題である。ブレンターノにとって「内的知覚」の「外的知覚」にたいする優位は揺るぎなく、それは内的知覚が明証性に関わっているからにほかならない。しかもフッサールによれば、ブレンターノの知覚論は「私たちが内的知覚によって経験するのは心的現象であり、外的知覚によって経験するのは物的現象だけである⁶³」(L.U. II -2/231) という平行関係に基づいている。

確かに、フッサールは、ブレンターノの試みがそれまでの「粗雑で曖昧なロックの諸規定を適切に変様し、もっと深く掘り下げる努力」(*ibid.*, 232)の結果であることは認めている。内的知覚と外的知覚は、そもそも前者が明証的であるのにたいして、後者がひとを欺くと判断されてきた。しかしブレンターノらの経験的立場の「記述心理学」の功績は「現象という真の所与に定位した定義を獲得」したことにある(*ibid.*, 227)。したがって、ブレンターノ以降、心的現象と物的現象を定義するにあたって「私たちが体験しているがままの現象の記述的特徴だけが定義の決め手になる」のであり、心理学が心的現象についての学として定義されることになる。

しかし、フッサールも述べているように、自然科学が物的現象のみを扱う学として定義されたとしたら、外的に実際に存在する〈もの〉の諸性質はどこに存在する場を確保すればよいのだろうか。つまり、ブレンターノのように、自然科学が「感覚の内部に現れる物的現象」(*ibid.*, 228)だけを扱うとしたら、現に感覚されている客観的対象の諸性質はどこに存在すべきなのだろうか。

フッサールは、ブレンターノの“心的現象論”を高く評価する一方で、内的知覚と外的知覚とは「認識論的には同じ性格」のものであり、両者共に知覚にはちがいないと考えている (*ibid.*, 231)。知覚の内部に区別を設けるとすれば、「明証的な知覚と明証的ではない知覚」との区別、いいかえれば、「確実な知覚と不確実な知覚」とのあいだの区別しかない。しかも、「確実な知覚」が内的知覚に対応し、「不確実な知覚」が外的知覚に対応するわけではないことはいうまでもない。

フッサールにとって重要なのは、知覚が「解釈 (Interpretation)」あるいは「統覚 (Apperzeption)」であるからだ⁶⁴。「外的知覚は統覚である。それゆえ、〔知覚という〕概念の統一性が内的知覚もそうであることを要求するのである。知覚にとっては何かがそのなかで現出することが必要であり、そして私たちが現出作用 (Erscheinen) と呼んでいるものを形成するのが統覚である」(*ibid.*, 233. 強調フッサール)。たとえば、私が家を知覚する際に、家が私たちに現出するのは、「私実際に体験した感覚内容を何らかの仕方ですが解釈 (統覚) しているからにほかならない」(*ibid.*)。こうしたことは、なにも視覚的知覚に限った話ではない。聴覚的知覚においても、同様なことが起こっている。誰かが弾いているピアノの音が聞こえてくる場合に、私たちはその音を「ピアノの音」と解釈している。それは単なる物理的な波長をもった音ではなく、私たちによって解釈された「ピアノの音」である。つまり、フッサールによれば、私たちの意識に「現出」した「家」や「ピアノの音」は、客観的な物理的対象の性質ではなく、「現出す

る内容 (erscheinende Inhalte)」あるいは「知覚的解釈の内容 (Inhalte perzeptiver Interpretation)」、「統覚の内容」を形成しているのである (vgl. *Ibid.*)。

フッサールは、ブレンターノのように物的現象としての感覚的性質と物理的客観的な対象性質との区別を曖昧にしない。かれは、「現出」という術語の多義性を明確に自覚することによって、ブレンターノが陥った物的現象と心的現象との混同を避けようとする。ブレンターノは、自然科学の対象として物的現象を把握した結果、物的現象の《背後》に存在すると考えられる客観的な対象性質を明確にすることができなかった。それに対して、フッサールは、「現表象する感覚」すなわち「色や形などの体験された諸契機」と、こうした契機と対応する「(色や形をもつ) 対象自身の諸性質」とを区別する。そして、両者の区別は重要であり、「色の感覚と現出する物体そのものの色とを混同したり、形の感覚と物体そのものの形とを混同することは許されない」(*ibid.*, 234)。したがって、フッサールから見たとき、ブレンターノは、物的現象を「物理的なさまざまな〈もの〉(die physischen Dinge)」のみならず、それらの「性質 (Eigenschaft)」やそれらの「変化」も含めて考えられているといわざるをえない。それゆえ、ブレンターノは外的知覚によってもたらされた物的現象がさまざまに変化し、うつろいやすくひとを欺くものと見えたのである。しかしフッサールによれば、さまざまな「外的対象」だけでなく、「知覚に実的に属する諸内容」もまた「ひとを欺く性質」をもっているように見えるのも、知覚の本来の語義に十分に意識を働かせていないからだ。つまり、ブレンターノは、端的に言えば、感覚と知覚とを混同しているのである。「外的な対象 (家) が知覚されている場合、[その対象を] 現表象する感覚 (die präsentierenden Empfindungen) はこの知覚のなかで体験 (erleben) されてはいるが、しかし知覚 (wahrnehmen) されてはいない」のであり、「私たちが家の現実存在 (Existenz des Hauses) について欺か

れている場合にも、体験された感覚的諸内容の現実存在 (Existenz der erlebten sinnlichen Inhalte) については欺かれない」(*ibid.*, 237)。フッサールによれば、体験としての感覚は私たちを欺かないということだ。

しかし、フッサールは本当にブレンターノの“物的現象論”を正確に理解しているのだろうか。フッサールは、ブレンターノが「物的現象という名称のもとで、感覚された諸内容と現出している外的諸性質とを直ちに混同した」(*ibid.*, 243) と考えている。つまりフッサールによれば、ブレンターノが現象ということばの多義性に惑わされて、心的現象と物的現象の誤った二分法を採用してしまった。それゆえ、フッサールは、ブレンターノが物的現象を、あるときは「外的対象とその性質」と考えたり、またあるときは「感覚された内容、すなわち感覚性質」と考えたりすることに誤りの原因があるという。

たとえば、物的現象を現象的事物 (die phänomenale Dinge) のことだと理解すれば、それ自身が実際に現実存在 (existieren) しなくてもかまわない。この場合、物的現象が「ただ単に現象的および志向的に」現実存在するにすぎない。

「生産的想像による形成物 (die Gebilde der produktiven Phantasie)、すなわち絵画、彫像、詩などにおける芸術的表現 (Darstellung) の大部分の客観や幻覚や錯覚の諸客観 (die halluzinatorischen und illusorischen Objekte) は、単に現象的志向的に現実存在しているにすぎない。すなわち、本来的にいえばそれらはまったく現実存在しておらず、それらに相当する現出作用 (Erscheinungsakte) が、(その実的な志向的内実をとまなべて) 現実存在しているにすぎない」(L.U.II-2/244. 強調フッサール括弧内は第二版での補足)。

ここで注意すべきなのは、フッサールが生産的な働きをする「想像」

の「客観」や「幻覚や錯覚の諸客観」に言及していることである。かれによれば、それらは「単に現象的に志向的に現実存在しているにすぎない」。それらを成り立たせているのは、単なる志向的な現出作用でしかない。つまり、私たちが芸術作品を見たり、幻覚や錯覚のなかで知覚したりしている何か（＝客観）は、現出作用の働きに依存しているが、実際にはそれに対応する対象が現実存在しているわけではない。

それについて、物的現象を「感覚された内容」として理解すれば、事情は異なってくる。フッサールはベックリンの絵「楽園」を見ているとき、私たちの眼前にある絵について、そこで「感覚された（体験された）色彩内容や形態内容などは、この画像客観についての意識の实的成素」として存在しており、「画像客観（Bildobjekt）の意識は、感覚された諸内容が心像化の作用性格によって生化されることによって、それら諸内容から形成される」（L.U. II - 2 / 244）という。この場合、物的現象は「感覚された内容」として体験されており、「決してただ単に現象的に、志向的に（中略）現実存在しているのではなく、実際に現実に存在している（*ibid.*）」。

しかしフッサールが、ブレンターノの物的現象を「現象的事物」として理解する場合の具体例として、想像による現出や、幻覚・錯覚による現出を指摘しているのは、はっきりいって正当ではない。しかもブレンターノを批判する際に、『経験的立場からの心理学』から引用するが、それ自体が根本的に間違っていることは注意しなければならない。フッサールは、ブレンターノの文章を意図的に改竄して引用している。両者の該当箇所を比較して見れば、その差異は一目瞭然である。まずはフッサールがブレンターノから引用した文章である。

「物的現象の例として、私が見ている形態や景色……私が感覚している暖かさ、冷たさ、臭いなどが挙げられる」（L.U.II-2/244.

強調フッサール)

それに対して、ブレンターノの文章は次のようなものである。

「物的現象の具体例は、私が見る色、形態、景色、私が聴く和音、私の感じる暖かさ、冷たさ、香り、また想像のなかで私に現出する類似した形成体である⁶⁵」

ブレンターノの文章には強調はなく、物的現象の具体例だけがただ並列的に列挙されているにすぎない。それではなぜ、フッサールは正確に引用しないばかりか、ブレンターノが強調しなかったところまで、あえて強調したのだろうか。

おそらくフッサールは、「私が見ている景色」までブレンターノが物的現象に組み込んだことが不満だったと思われる。「景色」は客観的な〈もの〉ではなく、まして単純な感覚的性質でもない。それは私たちの意識のなかで形成される「感覚の複合体」であり、空間的な拡がりをもった「延長されたもの」である。そしてブレンターノの真意からすれば、物的現象が「空間的・物体的・延長的」であることは充分可能であったはずだ。だからこそ、自然科学の対象として、物的現象を考えることができたといってよい。したがって、ブレンターノの立場に立つ限り、単純に物的現象を非空間的な感覚的性質として限定してはならない。

ところがフッサールにしてみれば、物的現象が現象的事物やその性質であり、現象的事物の現実存在を度外視することが可能であるとすれば、物的現象が存在しない以上、その空間性や物体性などは問題にならない。また、もしも物的現象を感覚内容と考えるならば、それは体験の実的成素として知覚に含まれていることによって空間性をもつことはない。いずれにせよ、フッサールの立場に立てば、「景色」が

「延長的なもの」であることを認めるとすれば、「景色」を物的現象に組み込むことはありえないことになる。ここに、ブレンターノの錯誤を読み取ることは、フッサールにとっては当然のことだったといっ
 よい。

フッサールによれば、感覚内容は現実に存在しなければならない体験の契機であり、志向的存在ではない。それに対して、現象的・志向的な物的現象について、フッサールは「ただ単に憶測されただけの現出している内容」と語っている。しかし、ブレンターノは物的現象の存在について、それが「憶測されただけの現出内容」と考えていたのだろうか。もちろん、フッサールほど厳密に物的現象と心的現象との差異を区別しなかったとはいえ、物的現象を感覚的性質として解することは可能であるし、フッサールのいう「感覚内容」をも意味していたといっても大過ないだろう。確かにブレンターノは、心理学の対象としては物的現象を排除し、そこに相対的価値しか認めていない。しかし、物的現象は心的現象の“対象”として、志向的関係を保持していることは注意すべきであろう。

私たちが絵画を見ているとき、そこで見られているさまざまな色彩や形態は、物的現象としての感覚をもたらしているものであり、その絵画で用いられている色彩や形態は、三次元的な空間の内部で空間的に現出しているし、私たちの表象のうちに現象しているのである。もちろんそれは、絵画や彫像、詩などで表現されている実在的な事物に対応していない「客観」でもなければ、幻覚や錯覚のうちにしている「客観」でもなく、憶測されたものでもない。私たちが絵画を見ているときに感じているのは、その絵画の色であり形である。この意味で、ブレンターノの現象論は、フッサールの批判を超えてもなお有効に機能しうると考えることができる。そして、フッサールは自らの現象学を確立していく上で、ブレンターノの“心的現象論”を何とか批判したいがために、多少の勇み足をしてしまったというのが実情であろう。

注

※文中におけるフッサールからの引用は慣例に従い、『フッサール著作集 (Husserliana)』の巻数をローマ数字で表記し、斜線のあとに頁数を記す。また『論理学研究』からの引用については L.U. (Logische Untersuchungen) と略記し、巻数をローマ数字ならびに算用数字で記したあと、斜線の後に頁数を記す。

- 1 Cf. M.Heidegger, Prolegomena zur Geschichte des Zeitbegriffs, Gesamtausgabe, Bd.20, Frankfurt a.M., 1979, S.34. (常俊宗三郎他訳『時間概念の歴史への序説』、ハイデッガー全集第20巻、第2部門講義(1919-1944)、創文社、1988年、33頁) 参照。
- 2 L.Landgrebe, Der Weg der Phänomenologie: Das Problem einer ursprünglichen Erfahrung, Güntersloher Verlagsheus Gert Mohn, 1978.(1.Auflage des Taschenbuches), S.11. (山崎庸佑他訳『現象学の道——根源的経験の問題』、木鐸社、1980年、12頁)。
- 3 プレンターノは、「志向性」についてまとまった見解を述べていない。したがって、かれの“志向性”論について検討する際には、あくまで私自身の解釈を含めた意味であえて“志向性”論と表記する。それに対して、フッサールは明瞭に「志向性論」そのものが存在すると考えられるのであって、志向性ということばを強調することはしない。
- 4 以下のラントグレーベの見解については、引用を含めて次を参照せよ。Vgl. L.Landgrebe, *ibid.*, S.11-12. (邦訳、13-15頁)
- 5 *Ibid.* (邦訳、13頁)
- 6 *Ibid.*, SS.11-12. (邦訳、13頁)
- 7 *Ibid.*, S.12. (邦訳、13頁)
- 8 *Ibid.*, S.12. (邦訳、13頁)
- 9 *Ibid.*, S.12. (邦訳、13頁)
- 10 ベルネは次のようにいっている。「志向性の学説のプレントナーとフッサールの関係を真摯に述べようとするなら、どの程度フッサールが批判においてプレントナーの立脚点をとりわけ志向的対象の「心的内存在」の場合において正しく再説したのか、また次にどれ程の批判がプレントナーをして自己の学説の明晰化あるいは変更へと促したのか、というこの論争点に関して自ら考えるところを表明せねばならないであろう」(R.Bernet, I.Kern, E.Marbach, Edmund Husserl: Darstellung seines Denkens, Felix Meiner Verlag, Hamburg, 1989, S.86. (千田義光他訳『フッサールの思想』、哲書房、1994年、133頁))

- 11 また視点を現象学から哲学全般へと移せば、フッサールとの関係とは別に、英米を中心とする分析哲学や言語哲学の領域で、ブレンターノが取り上げられたり、さらに範囲を広げていわゆる「ブレンターノ学派（独塊学派）」についての研究もまた進められたりしてきた。特に、英米哲学研究では、ブレンターノならびに現象学一般の普及と検討について、チザムの業績は忘れられてはならない。かれの哲学研究の初期に属する『知覚——哲学的研究』（1957）第11章「志向的内存在」のなかで、ブレンターノの“志向性”論が語られていることは注意されてよい。またチザムに限らず、ブレンターノやかれの学派についての関心が高まってきたのも、かれが中世スコラ哲学における「志向」概念を新たな装いのもとに哲学史上に登場させたことと密接な関係がある。ただ分析哲学・言語哲学の文脈では、志向性を意識の根本構造として理解する現象学とは異なり、言語の問題として志向性（指向性）を取り扱っていることは注意を要する。たとえば、言語における志向性（指向性）をめぐる「志向文」の存在身分の画定を推進してきたチザムと、「志向文」を否定する“還元主義者”セラーズとのあいだで交わされた往復書簡は有名である。こうした言語哲学による志向性研究の機運は、ブレンターノ哲学研究に限らず、陰に陽に現象学そのものにも影響を与えていることはいうまでもない。現在では、言語哲学との対話をなくしては新しい現象学哲学研究も存在しえないといっても過言ではない。したがって本論でも、分析哲学・言語哲学による「志向性」分析が、ブレンターノ哲学・現象学的「志向性」論の検討にとって重要な位置を占めていることをあらかじめ指摘しておきたい。
- 12 もちろん、ブレンターノが、アリストテレス以来の哲学史に通じているばかりでなく、それらの哲学から多くのものを継承していることを考えれば、「志向」概念の哲学史的背景について瞥見しておくことが望ましい。しかし、ここでの議論の中心はあくまでフッサールとの連関としてのブレンターノ哲学の位置づけであるため、必要以外の語源学的な論究は差し控えたい。
- 13 ブレンターノは次のようにいっている。「すでにアリストテレスは、この心的な住み着き（*Einwohnung*）について語っていた。かれの魂についての著作のなかで、かれは次のように語っていた。つまり、感じられたもの（*Empfundene*）としての感じられたものは、感じるもののなかに存在している。感覚（*Sinn*）とは質料なしに感じられたもの（*Empfundenen ohne die Materie*）を受容しているのであり、考えられたものは考える悟性のなかに存在している。…トマス・アクィナスが教えているのは、考えられたもの

は考えるもののなかに志向的に存在しているのであり、愛の対象は愛するもののなかに、欲求されたものは欲求するもののなかに志向的に存在するということであり、かれはこのことを神学的な目的のために用いているのである。聖書が聖なる精神の住み着きについて語るとき、かれはこれを通しての志向的な住み着きとして解明しているのである」(F.Brentano, *Psychologie vom empirischen Standpunkt : Erster Band*, Herg.von Oskar Kraus, Hamburg, Ph.B.Bd.192, 1973, S.125.

- 14 これらの指摘は、野家啓一におっている。野家啓一「志向性と指示行為——フェレスダールの「ノエマ」解釈をめぐる」(『無根拠からの出発』所収、勁草書房、1993年)参照。
- 15 たとえば、スピーゲルバークは、『現象学運動』のなかで、ブレンターノの「志向的」という概念について、特にトマスとの関係を強調している。そこでかれは、ブレンターノの「志向」概念の独自性をトマスのそれと比較して、その影響関係を認めながらも、ブレンターノがトマスと決定的に異なることを指摘している。つまり、「志向」は知識を獲得する過程において形成された、外界にあるものについての特殊な像や似姿を意味している。このとき志向は、アリストテレスの知覚論にまで遡りうるものであり、そこで問題になっているのは、“質料なき対象”の形式の受容の問題である。トマスによれば、*intentio sensibilis* と *intentio intelligibilis* とを区別し、さらにときどき *intentio intellecta* とを区別している。これらの区別は、端的にはスコラ哲学の「第一志向」と「第二志向」に相当するが、前者が具体的な対象を指示するのに対して、後者は論理的カテゴリーを指示するという点で異なっている。しかし、スコラ哲学においては、「志向」の特徴として「ある対象への指示」ということが積極的に主張されてきたわけではない。これに対して、ブレンターノの「志向的」という概念は、まさに「志向」というかたちで単独で名詞的に用いられているのではなく、「志向的内存在」や「志向的關係」として形容詞的に用いられている。つまり、ここでは「志向」という概念がはらむ「形式的な像」という意味が払拭されているといってよい。この意味で、ブレンターノにとって「志向的」という概念は、対象との関係を指し示しているといえよう (Cf. H. Spiegelberg, *The Phenomenological Movement : A historical introduction*, 3rd revised and enlarged edition, The Haag, 1982, pp.47-48.)。
- 16 Cf. K. Hedwig, "Intention : Outlines for the history of a phenomenological concept," , in *Philosophy and Phenomenological Research* 39, 1978-1979,

p.329.

- 17 アリストテレス『靈魂論』Ⅲ. 2. 425b24-25. (山本光雄訳『アリストテレス全集』第六巻所収、岩波書店、87頁)。
- 18 Hedwig, op. cit., p.329.
- 19 プレンターノは、特に実在性の区別についてはデカルトを援用している。Cf. F. Brentano, Wahrheit und Evidenz, Hrsrg.von Oskar Klaus, Hamburg, Ph.B.201, SS.17-18.
- 20 R. M. Chisholm, "Intentionality", in P. Edwards(ed.), The Encyclopedia of Philosophy vd. 4, New York 1967, p.201.
- 21 デカルト「神の存在と靈魂の身体から区別とを証明する、幾何学的な様式で配列された諸根拠」(『省察』第二答弁、『デカルト全集』所収、白水社) 196-197頁。
- 22 この点についてチザムは「客観的・実念的存在」を「志向の対象」と同義なものとして考えている。ただ注意しなければならないのは、チザムの「志向の対象」とは、「思考された対象」を意味しており、対象(=客観 object)そのものが心的なものなのか客観的に外的に存在するものなのか疑問の余地があるということである。このことについては、チザムのプレントナーノ解釈の妥当性を検討する際に問題にしたい。
- 23 V. Oittinen, "Gegenstand," in Hans Jörg Sandkühler (Hrsg.), Europäische Enzyklopädie zu Philosophie und Wissenschaften, Bd.2., F-K., Hamburg, 1990, S.250. また、ヘドウィックは、プレントナーノの『アリストテレスの心理学』(1867)から、かれの「objektiv」概念の解釈について引用している。「私たちは「objektiv」という表現をここで用いるが、以下ではそれは現代において用いられている意味ではなく、中世のアリストテレス研究者がその表現(スコラ哲学的な objektive)とよく結びつけていたような意味で用いることにする。そしてその意味は、かなり簡潔で的確なアリストテレスの教説を可能にしてくれるのである。物理的な性状としての質料的なものは、冷たくなること(Kalten)における冷たさ(Kälte)であり、客観(Objekt)として、すなわち感じられたものとして、その冷たさは冷たさを感じること(Kälteführenden)のなかに存在する」(Cf. K. Hedwig, op.cit., p.328)。
- 24 たとえば、アクリルによれば、アリストテレス知覚論において重要なのは、「感覚的知覚においては、対象から第一の感覚器官にいたる物理的・生理的な因果の連鎖がなければならないということ、その連鎖の終点における変化は、初期の段階の変化や最初の変化に類似しているか、あるいは何らかの仕

方で対応していなければならないということである」(ジョン・L・アクリル『哲学者アリストテレス』藤沢令夫・山口義久訳、紀伊國屋書店、1985年、148-149頁)。以上からもわかるように、アリストテレスにおいては、対象と感覚とのあいだにある種の類似関係、もしくは対応関係が存在している。というのも、外界に実在している対象は、まさに感覚器官をとおして感覚されるとき、精神の内部でその対象の性質と「類似」あるいは「対応」していなければならない。したがって、私たちの感覚は対象の性質と類似あるいは対応していることによって、ひとつの「像」や「似姿」を形成しているといつてよい。このように感覚されたものと対象との関係が、オリジナルな性質とその“記号”としての「感覚」という関係として考えられるように思われる。

- 25 Cf. K. Hedwig, op.cit., p.330.
- 26 Cf. K.Twardowski, Zur Lehre vom Inhalt und Gegenstand der Vorstellungen, Eine Psychologische Untersuchung, Philosophia Verlag, 1894 (1982).
- 27 Brentano, Psychologie, S.124.
- 28 Chisholm, op. cit., p.201
- 29 Cf. Linda L. McAlister, "Chisholm and Brentano on intentionality", in The Review of Metaphysics, XXVIII (1974), pp. 328-338 ; Richard E. Aquila, Intentionality, A Study of Mental Acts (University Park : The Pennsylvania State University Press, 1977). チザムやマカリストーらの議論の展開については、以下も参照。R. Richardson, "Brentano on Intentional Inexistence and the Distinction Between Mental and Physical Phenomena", in Archiv für Geschichte der Philosophie Band. 65, 1983. これらの著作の指示については、村田純一の指摘におっている。記して感謝したい。村田純一「現象学の成立—ブレンダーとフッサール」(岩波講座・『現代思想』6「現象学運動」所収、岩波書店、1993年)参照。
- 30 Brentano, ibid., S109
- 31 Cf. Brentano, ibid., S.112
- 32 Cf. Brentano, ibid., S.111
- 33 McAlister, op.cit., p.330.
- 34 Ibid.
- 35 Ibid., p.331
- 36 Ibid.
- 37 Brentano, op.cit., S.124 Anm.
- 38 Richardson, op.cit., p.271.

- 39 ただブレンターノにおいては、明確に作用・内容・対象の区別がないが、トワルドウスキーは、ここに三者の区別が存在することを明瞭に指摘している。
cf. Twardowski, Zur Lehre von Inhalt und Gegenstand der Vorstellungen.
- 40 Brentano, op. cit., S.40
- 41 Ibid., S.13
- 42 Brentano, ibid., S.30.
- 43 Cf. R. Berner / I. Kern / E. Marbach, Edmund Husserl : Darstellung seines Denkens, Felix Meiner Verlag, 1989. S. 86. (千田義光他訳『フッサールの思想』、哲書房、1994年、133頁)
- 44 Brentano, ibid., SS.111-112.
- 45 ここで再度強調しておきたいのは、ブレンターノが心理学の基礎の上に美学や倫理学を建設しようとしていたということである。たとえば、『経験的立場からの心理学』(1874) からしばらくして出版された『道徳的認識の源泉について』(1889) 初版序言のなかで、倫理学的な問題の検討が「“記述的心理学” の思想圏に属する」と語っていることから、心理学が哲学のみならず倫理学の究極的な基礎づけのための学であるという確信をもっていることは明らかである。この点についてはここでは指摘するだけにとどめるが、フッサールにおける〈倫理学の基礎づけ〉という動機の淵源になっていると考えられる (cf. E.Brentano, Vom Ursprung sittlicher Erkenntnis, S.3.)。
- 46 Ibid., S.117.
- 47 Ibid., S.128.
- 48 Ibid., S.129.
- 49 Ibid.
- 50 O.Kraus, "Einleitung des Herausgebers," in Brentano, Psychologie vom empirischen Standpunkt : Erster Band., S.LXXIX.
- 51 Brentano, Psychologie, S.28.
- 52 Ibid.
- 53 Ibid.
- 54 Ibid., SS.179-180.
- 55 Ibid., S.180
- 56 Hedwig, op. cit. p.331
- 57 この点については、「意識の可能性をめぐる無限後退」の問題と「内包的後退」の問題として、村田純一が分析している (前掲書、34-36 頁参照)。村田は、ブレンターノの心理学を「現象学の成立史」の中で位置づけるというかたち

ではあるが、ブレンターノにおける“志向性”の問題を要領よくまとめている。

- 58 F.Récanati, *La tranceparance et l' énonciation: pour introduction à la pragmatique*, Éditions de Seuil, 1979 p.23. (菅野盾樹訳『ことばの運命』、新曜社、1982年)
- 59 Récanati, *ibid.*, p.23 (邦訳、13頁)
- 60 Récanati, *ibid.*, pp.22-23.
- 61 このような比喩をレカナティも用いている。レカナティによれば、「記号とは自分自身とは異なる〈もの〉を見せてくれる鏡のようである。もっと適切に言えば、記号とは、自分自身とは異なる〈もの〉を見せてくれる透明なガラスのようなものである。しかしまた、鏡もガラスも、不透明になるという特性をもっている。いいかえれば、それらは、逆に熟慮に身を委ねるために、精神の眼を逃れることをやめることができるのだ。つまり、ある対象は、記号として熟慮されることをやめることができ、〈もの〉として熟慮されることができるのである。…それ〔記号としての対象〕は、不透明になり、その対象を透かして第二の対象を見ることを許すような透明さを失うのである」(Récanati, *ibid.*, p.33 (邦訳 25頁))。
- 62 Récanati, *Ibid.*, p.23. (前掲書、14頁)
- 63 フッサールの『論理学研究』(Husserl, *Logische Untersuchungen. Zweiter Band ; Elemente einer Phänomenologischen Aufklärung der Erkenntnis. II .Teil*) については慣例に従ってL. U. と表記する。また、括弧内のローマ数字は『論理学研究』の巻数を表し、斜線右の算用数字は当該箇所を頁数を表す。
- 64 フッサールは、初版(1901)では「解釈」ということばを用いているが、第二版(1922)では「統覚」ということばを用いている。フッサールは、第二版序言で次のようにいっている。「多くのひとに利用された補遺の『外的知覚と内的知覚』については、ある程度の改訂をなしえたる原文の主要部分は初版のままであるとはいえ、今回の改訂で著しく改善されたものと思われる」(HuaXIX/2,536)。しかし、フッサールがいうように、この改訂が「改善」になっているのかどうかは問題なしとしない。もちろん、心理学主義的哲学から現象学的哲学への移行を、文字どおり“発展”と考える限りにおいては、「改善」であろう。この点については、後に問題にすることにしたい。
- 65 Brentano, *Psychologie*, S.112.